

Title	書評：竹ノ下弘久著『仕事と不平等の社会学』弘文堂、2013年
Sub Title	
Author	長松, 奈美江(Nagamatsu, Namie)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.165- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「書評：竹ノ下弘久著『仕事と不平等の社会学』」
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0165">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0165</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：竹ノ下弘久著『仕事と不平等の社会学』弘文堂，2013年

長松 奈美江

---

かつて「一億総中流」と言われた日本社会において、様々な格差や不平等が指摘されるようになって久しい。所得や資産などの経済的資源の不平等、教育達成の出身階層間格差など、社会における様々な格差や不平等が人々の関心を集めている。

社会学においては、「階級」あるいは「階層」概念が、特に労働市場における格差や不平等を分析するために用いられてきた。しかし現在、日本社会における格差や不平等の様態や過程を分析するうえで、これらの概念の有効性には疑問が投げかけられている。従来の「階級」や「階層」の概念、あるいは階級・階層研究の枠組みではうまく分析できない不平等があり、それらの不平等の重要性が増してきているからである。たとえば、近年の日本では非正規雇用（パートやアルバイト、派遣労働者など）が増加し、彼らの労働条件の悪さや雇用形態間の不平等が問題になっている。また、少子高齢社会における労働力不足を背景にして、日本でも徐々に移民労働者の受け入れが進んでいる。ただし、特に農業や製造業で働く移民の労働条件は日本人労働者に比べてかなり悪いものである。階級・階層研究は、主として職業や従業上の地位に注目して階級や階層を分類し、労働市場における不平等を分析してきた。しかし、日本の制度的状況（雇用政策や移民政策など）に左右される不平等の様態や過程をうまく分析してはこなかった、といえるだろう。

本書は、階級・階層に関する理論や方法論だけでなく、各国の制度的状況と不平等との関係にも目を配った、階級・階層研究のテキストである。本書の特徴として、以下の2点を指摘することができる。第一に、本書では、階級・階層研究のこれまでの国内外での展開が、バランスよくまとめられている。第二に、日本の階級・階層研究ではあまり注目されてこなかった不平等と制度編成（社会保障制度、家族政策、教育政策、雇用政策など）の関係に着目しつつ、日本における不平等の特徴を諸外国との比較から明らかにしている。

第一点目に関しては、第二次世界大戦後に進展した社会移動の国際比較研究、アメリカにおける地位達成分析、ウェーバー主義階級論、マルクス主義階級論、ログリニア分析を用いた移動表分析、日本におけるSSM調査研究などの諸潮流が、バランスよく説明されている。さらに本書は、それぞれの社会で生み出された階級や階層に関する概念や理論が、不平等に関するどのような社会的リアリティを反映しているかにも目を配っている。たとえば、近年のアメリカにおいては、詳細な職業分類で不平等（所得格差や不平等意識の違いなど）を捉えようとするマイクロ階級論が注目されている。筆者によれば、「マイクロ階級論は、社会の中の格差、不平等構造は職業によってこそ把握できるという考え方」（本書47ページ）に立脚している。さらに、

長松奈美江「書評：竹ノ下弘久著『仕事と不平等の社会学』  
『三田社会学』第20号（2015年7月）165-167頁

ミクロ階級論では、不平等は大きな階級間の断絶というよりは、個人がその間をより頻繁に移動できる連続的なものとして捉えられている。これらの点に関して、ミクロ階級論は、「ブラウとダンカンらの地位達成モデルの議論とも整合的である」(本書 47 ページ) と言ってよい。筆者によれば、「このように考えればミクロ階級論は、アメリカ社会を前提とする既存の階層研究の理論枠組みに大きく埋め込まれ、そのなかで創出されていることを理解する必要がある」(本書 47 ページ) という。このように、概念や理論が生み出された社会的背景を重視することは、その社会に特有な制度編成のあり方に目を配ることにも繋がっていく。

また本書では、日本の階級・階層に関する学問的状况について、他国との比較から学ぶことができる。日本の階級・階層研究は、研究の初期段階から、理論ならびに方法論に関して欧米(特にイギリスとアメリカ)の研究に大きく依ってきた。ただし、同じ「階層」や「階級」という概念が使用されていたとしても、それぞれの社会においては、これらの概念が意味する内容が異なっている。日本の学問的状况に関して特徴的なことは、「日本では階級概念に対する過度なマルクス主義的前提がある」(本書 48 ページ) ことである。このことを反映して、日本では、ヨーロッパを中心とするウェーバー主義的な「階級」も、「階層」として理解されてきた。そして、日本における「階層」概念は、ヨーロッパにおける「階級」とも、アメリカにおける「階層」や「階級」とも異なる、独自の発展を遂げてきた。とりわけ、筆者も指摘するように、日本の「階層」概念は、労働市場における不平等だけではなく、学歴による格差や生活様式の違いなども包含する多義的な概念になっていることに注意が必要である。

つまり、同じ「階層」という概念でも意味内容が異なっていたり、「階級」という概念そのものの使用が避けられる、という状況がある。しかしながらこのような状況は、それぞれの社会において使用されている「階級」概念の異同について議論したり、日本社会に適した不平等概念を追究していく可能性の障害になっているのではないだろうか。筆者はこのような状況を踏まえたくて、以下のように述べている。

現代日本社会における階層構造についての考察を理論的に深めていくには、あらゆる社会的不平等の現象を階層概念へと包摂するよりも、日本語の階級概念をマルクス主義のイデオロギーから自由にし、多様な定義を内包する階級概念を用いて、その構造についての理論的な議論を追求する必要がある。(本書 62 ページ)

とりわけ、労働市場における不平等を分析する概念としての階級概念の有効性を、マルクス主義的前提から離れて考えていくことが必要であるだろう。

本書の第二の特徴は、不平等の様態や過程に影響を与える制度編成に注目し、国際比較研究の視点から日本の状況を明らかにしようとしている点である。本書の後半では、親の関与と学業達成についての日韓比較(8章)、自発的移動と非自発的移動に注目した労働市場と職業キャリアの状況(9章)、グローバリゼーションと労働市場の制度編成(10章)、東アジア諸国にお

ける自営業への移動（11章）、日本における移民と社会階層（12章）に関して、実証分析が展開されている。たとえば8章では、親の関与が子どもの学業達成に与える影響は日本と韓国で異なること、その相違は日韓の制度的状況を大きく反映していることが示されている。また11章では、日本、台湾、韓国における自営業への移動プロセスの相違が明らかにされている。日本は、労働市場の流動性が低く、自営業への参入障壁が高いため、自営業への移動と結びつく人的資本に関連する変数の効果が強い。一方、韓国と台湾では、労働市場の流動性が高く、自営業への参入障壁が低いため、自営業への移動にかかわる諸変数の影響力が全般的に弱いことが示されている。

本書で説明されているように、第三世代までの社会移動研究では、産業化仮説やFJH命題の検証が中心となっており、そこではどちらかという各国の異質性よりも共通性が強調されてきた。しかし、同じように産業化や脱工業化、グローバル化などの変化を経験していても、各国における不平等の状況はその国の制度編成のあり方に左右されて、大きく異なっている。日本社会における不平等の状況を理解するうえで、様々な制度的状況に注目することは不可欠であるといえよう。筆者も強調するように、制度をみなければ、日本社会において特徴的な不平等—非正規雇用や移民労働者などに関する一状況を理解することはできないからである。

以上より、これまでの階級・階層研究の枠組みを前提としつつ、制度編成に注目して労働市場における不平等を読み解くという本書のアプローチは、階級・階層研究の今後の方向性を示すものであるといえるだろう。もちろん、制度といっても様々な種類のものがある。本書では、労働市場における不平等の状況に影響を与えるあらゆる制度が取り上げられているわけではない。労働市場における不平等と制度編成との関係性を、個別テーマに注目しながら論じていく作業は、階級・階層研究者の今後の課題であろう。とりわけ、評者が関心をもったのは、各国の制度的状況の違いをもたらしている要因や、制度を支え、あるいは変化させる要因についてである。たとえば10章では、グローバル化は労働市場の流動化を大きくもたらす半面、雇用の流動化のあり方は、これまでに各国で形成されてきた労使関係、福祉レジーム、雇用法制の影響を大きく受けていることが示されている。たしかに日本の雇用の流動化のあり方、とりわけ非正規雇用の状況は、日本のこれまでの制度編成のあり方に大きく左右されている。では、このような状況に対して労働者はどう考え、どう行動するのか。労働者の意識や行動が日本社会の制度編成のあり方とどう関連していくのか。階層と政治というテーマもまた、重要であるだろう。

いずれにせよ、本書はこれから階級・階層研究について学ぶ者に「道しるべ」を与える書であることは確かである。

（ながまつ なみえ 関西学院大学）